

美容皮膚科分野でのプラセンタ療法

医) 千美会 千春皮膚科クリニック・院長
渡邊 千春 (ワタナベ チハル)

座長：鄭 栄鳳 医) 鳳栄会 清水スキンクリニック・院長
五十嵐 豪 五十嵐レディースクリニック・院長

略歴

1993年 東京医科大学卒業
東京医科大学皮膚科勤務
1997年 板橋中央病院皮膚科医長
1999年 東京医科大学皮膚科勤務
2000年 東京医科大学皮膚科助手
2003年 肌クリニック大宮 院長
2008年 肌クリニック大宮 ベルビー赤坂 総院長
2012年 千春皮膚科クリニック 開院
2019年 千春皮膚科クリニック広尾院 開院



所属学会・資格

医学博士

日本皮膚科学会認定皮膚科専門医、日本プラセンタ医学会理事、
日本レーザー医学会専門医・評議員、AMI Japan Senior Trainer (アラガン社指導医)、
日本アレルギー学会会員、日本臨床皮膚科外学会会員、日本抗加齢医学会会員、
日本美容皮膚科学会会員、日本医学脱毛学会会員

プラセンタはメラニン色素を抑制し、コラーゲン（ハリ、ツヤ）、ヒアルロン酸（水分）、エラスチン（ハリ）等の再生を促進します。また、体内の新陳代謝を活発にして、血行を促進し、免疫力を高め、過酸化脂質や活性酸素など肌の老化の原因を抑えると言われています。プラセンタは安価で安全性も高く、他の施術と組み合わせて治療することで相乗効果をもたらすことができ当院では皮膚科一般治療だけでなく、しみ、しわ、ニキビ、毛穴などの美肌治療を目的としてさまざまな肌治療にプラセンタを用いています。例えばイオン導入は、電気の反発力を利用して真皮内に有効成分を押し込む方法で通常の外用の200倍の浸透力があると言われており、当院では、5%ビタミンC溶液と同時にプラセンタを導入することで美白効果を高めています。その他、エレクトロポレーション、メソセラピー、熱機械式アブレーションなどと組み合わせて使用しており症例を供覧致します。

更年期を幸年期にするプラセンタ療法 ～人生100年時代をポジティブに～

医) いぶき会 針間産婦人科・院長
金子 法子 (カネコ ノリコ)

座長：鄭 栄鳳 医) 鳳栄会 清水スキンクリニック・院長
五十嵐 豪 五十嵐レディースクリニック・院長

略歴

長年にわたり、年間30-40回の性教育、人権教育、女性の健康教育などの講演活動を行っている。

クリニックには2021年春より「にじいろ外来」を設置し、公認心理師とともに主に性別違和の当事者の方の相談、診療にあたっている。

専門医・認定医・その他

日本産婦人科学会専門医、母体保護法指定医、日本性感染症学会認定医、日本抗加齢学会専門医、日本スポーツ協会公認スポーツドクター、日本医師会認定健康スポーツ医、日本産婦人科学会認定女性ヘルスケアアドバイザー、日本思春期学会性教育認定講師、女子フットサルトップリーグチーム「ミネルバ宇部」のチームドクター



受賞歴

第五回西予市おイネ賞全国奨励賞受賞

2017年度山口県医師会功労賞受賞

最近では更年期に関して、マスメディアやSNSが取り上げることも多く、更年期の過ごし方や更年期障害の治療法について多くの女性が知る世の中となった。バブル世代が更年期を乗り越えた昨今、人生100年時代に向けて、さらなるアンチエイジングを希求するようになってきた。2023年の女性の平均寿命は87歳、健康寿命は75歳であり、QOLに直結する健康寿命を延ばすのが喫緊の課題である。女性のライフステージから区別すると、成熟期の後は、更年期、老年期と女性にとっては成熟期を過ぎればあとは下り坂、、、という空気が言葉一つからも伺える。

更年期は更に歳をとる時期ではなく、「幸せに歳を重ねる時期」であるべきで、そのためにはゆっくりと自分と向き合い、身体の変化と心のゆらぎを正しく理解した上で、適切なホルモン補充療法などの治療やサプリメントの摂取、運動をはじめとする生活習慣の改善が推奨される。

更年期から老年期(演者的には成熟期などの言葉に変えて欲しい!)にかけて、心身ともにハッピーに生きていくためのヒントと、その一翼を担うプラセンタ療法について、これまでに経験してきた数々の症例の提示と、どのような効果が期待できるかをお話したい。

保険診療におけるプラセンタ製剤

山本医院・院長

山本 俊昭 (ヤマモト トシアキ)

座長：鄭 榮鳳 (医) 鳳栄会 清水スキンクリニック・院長
五十嵐 豪 五十嵐レディースクリニック・院長

略歴

1962年神戸市生まれ

京都大学で有機化学を学んだ後、滋賀医科大学卒業

京都大学病院、関西電力病院等で主に肝臓の治療に従事

京都市内に内科診療所を開業と同時に、ラエンネック、

メルスモンを使った穏やかな加療を行っています



現在のプラセンタ製剤の使用状況を推察しますと、とても効能の幅の大きい薬剤であるが故、自由診療での使用が保険診療より多い印象を受けます。しかしながら厚労省の認可を受けた製剤ですから、適応病名に対して適切に使用すれば当然保険診療が成立するわけです。

保険診療としてプラセンタ製剤を使用する場合、選択肢はメルスモン製薬のメルスモン、日本生物製剤のラエンネックの2製剤しかありません。メルスモンは昭和31年に、ラエンネックは昭和34年に認可された歴史ある製剤です。いずれも60年以上にわたり使用されており重大な副作用等も発現しておりません。また長期にわたり注射を受けている患者さんもたくさんおられます。

このように身体に優しいプラセンタ製剤の保険診療の実際、および使用経験についてお話ししたいと思います。

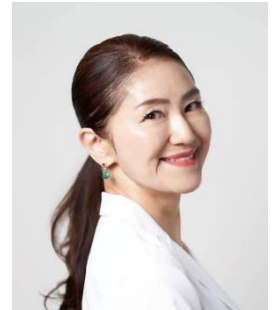
プラセンタとハーブピーリングでの症例 報告

株式会社 三.一.五・代表取締役
上田 珠良 (ウエダ タマオ)

座長：中村 光伸 (医)最匠会 光伸メディカルクリニック・理事長
北野原 正高 きたのはら女性クリニック・院長

略歴

1967年 山口県生まれ
1985年 広島大学 学校教育学部卒業
2006年 主婦、エステサロン勤務を経て「エステサロン エンジェル」設立
2018年 株式会社三.一.五 設立しTIPブランド立上げ、スクール事業、卸業開始



古くからヨーロッパでは、湖底に生息する海綿を使用した民間療法としてハーブピーリングが行われてきました。

棘状の海綿(スポンジア)をマッサージテクニックにより皮膚(毛穴)から浸透させることで、人間が持っている異物反応が働き、血液循環と新陳代謝が活発化し、ターンオーバーが正常化するという理論です。

このハーブピーリングで、肌質が改善する過程において、プラセンタ化粧品による抗炎症作用や細胞賦活作用、プラセンタ内服による内分泌調整作用や自律神経調整作用が大いに役立つことを見出しました。

今回、このハーブとプラセンタを使用したいくつかの症例を供覧させていただきます。

プラセンタ組織療法

原クリニック・院長
原 靖 (ハラ ヤスシ)

座長：中村 光伸 (医)最匠会 光伸メディカルクリニック・理事長
北野原 正高 きたのはら女性クリニック・院長

略歴

- 1994年 久留米大学医学部卒業、同大学外科学教室入局
- 2001年 久留米大学大学院 医学研究科外科系専攻博士課程卒業
社会保険田川病院、甘木朝倉医師会立朝倉病院、原外科医院などを経て
- 2013年 原クリニックを開院し、現在に至る



「ヒト胎盤」を利用したプラセンタ療法の中の一つに「プラセンタ組織療法」がある。これは以前には胎盤埋没療法と言われていて、その言葉どおり“胎盤を身体に埋め込む”という治療法である。多くの医療機関で使用されているヒト胎盤抽出物由来の注射製剤であるメルスモンやラエンネックに比べて手間もかかる為、施術している医療機関はとてまもなく現在では一種独特な治療法であろう。当院は1989年（平成元年）からこの療法に携わってきており、自家製剤で今日までこの療法を行ってきた。

今回は短い時間ではあるが、プラセンタ組織療法の概略と治療を行った症例をお話しさせて頂く予定である。

プラセンタ経穴注射と漢方エキス製剤の併用が奏効した重度腰椎椎間板ヘルニアの一例

いしつか脳神経クリニック 漢方内科
石東 麻里子 (イシツカ マリコ)

座長：中村 光伸 (医)最匠会 光伸メディカルクリニック・理事長
北野原 正高 きたのはら女性クリニック・院長

略歴

久留米大学医学部医学科卒業

臨床研修修了後、精神科医であり漢方医でもある父が手術ミスで意識不明になり、父の医院を急遽継ぐことになる。プラセンタ経穴注射や漢方処方を求める患者さんに、父のカルテと東洋医学書を頼りに、必死に向き合う中で確実な効果を実感し、東洋医学に魅了されていく。

2009年 中国や韓国に翻訳出版されている「経方医学」の著者である江部洋一郎に師事し、3年間難治性疾患に対する漢方治療を学ぶ。傷寒論と金匱要略の脈診について体系的にまとめた「経方脈学」を共同執筆。

2012年 ミディ漢方医院福岡を開院。

2020年 夫の医院であるいしつか脳神経クリニックに漢方内科を開設、現在に至る。自身出産時の胎盤を「紫河車」に修治した経験から本学会に入会し、プラセンタ経穴注射を専門とする。



【症例】

40代、女性。X年11月、左坐骨神経痛と歩行困難が出現。整形外科受診し、MRIにてL5/S1腰椎椎間板ヘルニアを認めた。鎮痛薬等の服用、神経根ブロック注射を数回施行されたが、症状の改善は一時的であった。歩行困難が継続するならば手術になると整形外科の医師から告げられ、東洋医学的アプローチができないかとX年12月に当院を受診した。腰椎MRI画像所見ではL5/S1髄核脱出型腰椎椎間板ヘルニアを認め、腰部から左下肢への放散性疼痛、左S1領域の痺れ、歩行時の左下肢脱力感が著しく、歩行困難な状態であった。初診時より、プラセンタ経穴注射（主穴：関元兪）と、牛車腎気丸合当帰芍薬散エキス製剤を開始。1ヶ月後歩行可能となりエキス製剤を減量、3ヶ月後には経穴注射のみ継続とし、日常生活が支障なく過ごせるようになった。

【考察・結語】

腰椎椎間板ヘルニアの60%以上の例で、3ヶ月以内に、マクロファージから放出されるTNF- α などのサイトカインやMMP、VEGFといった因子が関与してヘルニアが自然退縮するため、保存療法（薬物治療や硬膜外ブロック注射）が主であるが、馬尾症候群（両下肢の疼痛、感覚障害、運動障害、膀胱直腸障害、会陰部の感覚障害）を示す場合には予後不良とされ、保存療法を一定期間行っても改善しない場合に手術適応になる。ただし、薬物治療において世界各国で鎮痛薬、筋弛緩薬、抗うつ薬などによる治療が一般的に行われているが、これらの薬物の効果を検討したシステマティックレビューやRCTは存在していない。このため、東洋医学的治療が一助となり得るのではないかと考えている。本症例は漢方薬を減量中止し、経穴注射のみの継続で症状改善できているため、プラセンタ経穴注射がより有効であったと考えられる。筆者は紫河車の代用としてプラセンタ注射製剤を使用しているが、経穴注射には臨床応用のさらなる可能性を感じている。